

あきる野のシシ垣

あきる野に江戸時代から続く遺構「シシ垣」が残っていました。

シシ垣は、西日本で発達した獣害対策用の構築物です。ここで言うシシ垣は、漢字だと猪垣、鹿垣、猪鹿垣と様々な表記があります。これは、野生動物から農地を守る時、その地域で害獣となる獣によって漢字が決められていると言われます。その中でも一番多い表記は猪垣となるようです。

野生動物の分布とシシ垣の分布は、ほぼ一致しており、北関東以北の雪深いエリアではシシ類の生息は難しく、シシ垣も無いと言われます。また、形状についても地域による違いが見られます。四国では石を積み上げ、小さな万里の長城のような形となり、長野南部では土塁と丸太の垣根を組み合わせたような形になっているようです。

関東南部の東京では、シシ垣が調べられていることは少なく、青梅市に報告がある程度でしたが、あきる野の小和田でもその存在が確認できました。地元では、「シシ返し」と呼んでいます。シシ垣の外側には、溝が掘ってあり、石垣を乗り越えることを難しくしていたと聞きました。

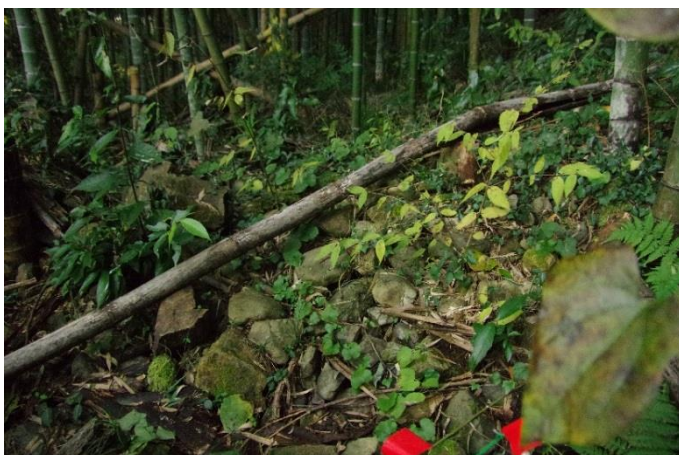
現在は、溝も埋まってしまい、石垣も崩れて平らになっていますが、小石から一抱えできる石が不自然に並び、かつてのシシ垣の存在が伺えます。石を積み上げた畦道状の場所など、シシ垣があると信じて見るとシシ垣の跡が見えてきます。



↑ かつてのシシ垣らしく石垣の上が道になっている様子です。



↑ 帯状に石が散乱している。



↑ なんとなく石垣に見える。



↑ 孟宗竹が石垣を崩している。

なぜ小和田にシシ垣が作られたかを考えると、シシ垣の周りは「北ピラ」という地名で崖の様な急斜面になっています。そのような斜面では、里山といわれる林地の利用が難しく、野生動物との緩衝帯となる里山の発達が難しくなります。したがって、山から畑地に野生動物が簡単に出てくる構図があったと考えられます。

その状況から先人達が家族や畑を守り生きて行くために、野生動物被害とどのように向き合い、そして苦勞してきたのが感じられます。



↑ 大きな石が並んでいます。おそらく、シシ垣の基礎部分になっていた石だと思われます。積み上げられた石は崩れて基礎しか残っていないのは残念です。

小和田のシシ垣の構造は、急斜面に石垣を積み上げ、さらに溝が掘ってあったと聞きました。山側に溝を掘ることでシシ垣がより高くなるので、シシ垣が多く残る西日本でも石垣と溝の組み合わせは広く見られます。

江戸時代は、全国の農村で獣害が大きな問題だったと言われています。用心棒ではないですが、村で銃をもった人を雇って田畑を守っていたという村の公会計簿の様な古文書も全国に残っているようです。

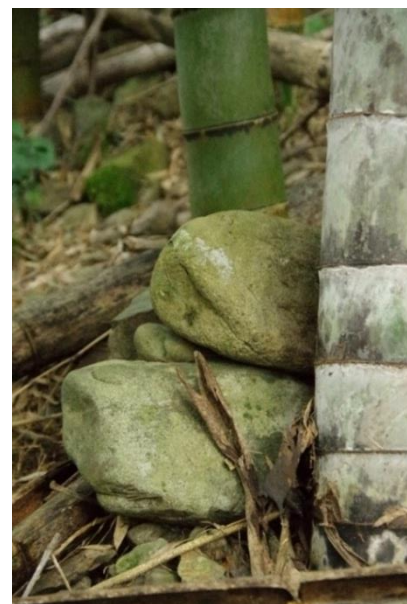
農村の暮らしの中で、猪やシカを捕食する「オオカミ」が神様として崇められたことも理解できます。しかし、オオカミによる捕食が田畑の野生動物被害を減らす事は無かったために、シシ垣が普及したと考えられています。

明治になり、農村にも銃器が普及したため、自分たちで獣害対策が出来るようになり、野生動物が激減したと言われています。日清・日露戦争を経験するなか、日本軍が大量の毛皮を防寒着に使うため、農村に銃器を払い下げ、狩猟を奨励し、毛皮を買い取ったと言われています。農村周辺の野生動物が減り、「シシ垣」の文化は忘れ去られたと思います。

●ピラと言う地形

古い日本語で、急斜面のことを「ヒラ」といったそうです。後の世に「ヒラ」の音に「平」の字が当てられて、「平ら」の意味に変わっていったといわれています。また、アイヌの言葉にも「ピラ」という言葉があり同様に崖や急斜面を意味する言葉といわれていることから、古い時代は広く崖を表す言葉として使われてきたようです。

小和田の「北ピラ」も御岳神社(小和田)の下急斜面を表して付いた地名だと考えています。このような地図に載らない地名が沢山あるようです。(杉野)



↑ 孟宗竹の侵入でシシ垣が崩され、石が散乱している状態。